

昭和二十年五月廿三日第三種郵便認可
 昭和二十九年四月二十八日運輸省特別授承認第三五二號
 昭和二十九年十月一日發行

第二十卷

十月號

淨

土



文

十月號

平等院の鳳凰堂は餘りにも有名ですが、本月のカメラは、餘り目につかないその中殿の屋背の銅鳳を紹介しました。三尺一寸八分で雌雄あり、堂の左右兩翼の寶珠露盤と相對して一段と美しさと品格とを興えております。何だか最近新聞で見たようだと思われのものもつともで、先頃、廣島の平和記念堂に、このイミテイションが取付けられた事が報ぜられました。

淨土十月號目次

卷頭言	(1)
靜秋淨土	吉田絃二郎(2)
講話衣食住の問題(3)	藤井實應(5)
古刹勝願寺のお十夜	藤田寛海(9)
鎌倉光明寺に詣でて	大橋俊雄(12)
盛岡の同信と結ぶ	佐藤賢順(32)

讀書案内

龜井勝一郎, 愛の無情について	...(16)
J・ネルー, インドの發見(上)	...(21)
鈴木大拙, よみがえる東洋	...(27)
家永三郎, 日本道德思想史	...(28)

佛教保育隨想	内山憲尙(15)
僧俗によ る座談會	佛教はこれでよいか.....(23)



近頃頗りに使われる言葉に、平和攻勢・文化攻勢というのがある。ソ連・中共等の日本への働きかけを指すのだが、こういう攻勢なら大いに歓迎したい。

政治や経済の攻勢は、敗戦の日本にとつては全く以つて迷惑千萬。眞平御免蒙りたい。何故なら、それは餘りにも段ちがいで、月とスツボンの關係にあるからである。ところがこと精神文化、學術方面となると、その懸隔は差程でもない。むしろ大いに攻勢を受けて手持ちの玉を琢磨すべきである。磨けば光る玉を持つてゐるのだから、此點は他の部面とは異り、適度の刺戟を得ることが肝要である。

幸いに、先様からカーテンを開いてどうぞと云つて下さつてゐる。ありがたくお招きに應じるべきである。氣の弱い駄々子が「俺を呼んでくれなきや、皆んな行かせないぞ」と意地悪るく、今度はこちらから紙のカーテンを張るべきではない。「そんならあんたも」といわれて、テレている姿が目に見える。

身にはボロをまとい、粗食に甘んじていても、持するに高邁な精神と深遠な英語があれば、何も憶することはない。鈴木大拙博士にしても、朝比奈管長にしても至極當り前の恰好で出かけたのである。別に新調の洋服も泊來の外套もお召しにはならなかつたらしい。それにもかゝわらず、彼の地でして來たことは、諸々の——特に視察と稱してお出かけになる——金色バッヂの諸公とは全然逆に、得て來たのではなく、與えて來たのである。貰つて來たのではなく、恵んで來たのである。佛教という、そして東洋的精神という、不壞にして永遠に新しきものを以つて西洋近代文明の上に一棒喰わして來たのである。戦争で勝つよりも、もつと喜ぶべきことではある。

豫言者故郷に入れられずとか。天才家人の知るところならずとか。自らの中に玉のあることに心づかずに、徒らに他人の持つ土偶人形を欲しがる無智どん欲には困つたものである。その意味でも、文化攻勢はありがたい。殊に名ざしでして貰えば尙ありがたい。そうすれば、今までそれ程と思わなかつた隣人が、反つて國外で名のあることに心づき、ひいては自分達の眞價を再認する機縁ともなるであらう。その機縁のトップを佛教界が切つたということとは、原子科學に於ける湯川博士の功績にも比して喜ばしい。要するに今の日本人は意識過剰で半分氣狂いみたいな状態にある。水をかぶせる役が必要である。

静 秋 淨 土



静かな秋の雨が降つてゐる。

秋の雨は近づく冬の聲音を連想させるので、一しほしみじみとした氣持ちに聽かれる。

秋の雨に濡れると庭の石も、のしめらんやみづひきのやうな雑草までが尊くながめられる。

秋の雨はその一滴一滴が靜かに石を、雑草を、さらに人間の魂を撫でてゆく。

冥途といふところはどんなところか知らないが、静かな

末 田 純 子

秋の雨の降つてゐる日は、この世界も冥途にちかいのではあるまいか。

何となく悠久なものについてかんがへさせられる秋の雨の日！ 何となく遠い過去を、迥かな未來をしみじみと思惟する秋の雨の日！ これこそ冥途の一日ではないだらうか。

秋の靜かな日が來た。

高い青空には細い素絹のやうな雲が飛んでゐる。

芙蓉が咲き、木犀が薫り、一つ一つの雑草も、道傍の小石も柔かな秋の日の光りを浴びてゐる。そして芙蓉も木犀も、雑草も路傍の小石も何か考へてゐる。

白い雲も何かかんがへながら青い大空を飛んでゐる。

ひたきが鳴いてゐる。烏が鳴いてゐる。みんな何かかんがへながら鳴いてゐる。

人間も亦何かかんがへては窓に凭つて静かな秋をながめてゐる。

雑草も悠久について思惟するのであらう、柔かな秋の日の光りを浴びてうなだれてゐる。

凡夫も静かな秋の日には生死を思ふ。

わたくしは冥途を知らない。しかし冥途は静かな秋の日に近いものであらう。

わたくしは黄金、瑠璃にかざられた浄土を知らない。

わたくしは秋の日に照らされた雑草と、秋の鳥の聲と、

こほろぎの聲とをめぐまれた現世の姿の裡に浄土に近いものを感じる。

だから秋の一日に生きることとは浄土の一日に生きることになる。

いつまでも幼い子供の心を失はない人こそ現世に浄土を感じることができらうであらう。

遠い過去を振りかへつて見ると、誰れでも美しい心の幼年時代や少年時代を持つてゐる。

わたくしにも少年時代の思ひ出がある。

わたくしは筑紫平野をつらぬいて走る國道を歩いてゐた。雨がはげしく降つてゐた。

二三里の間ほとんど人の子一人道を歩いてはゐなかつた。しかしただ一人後ろから來て、わたくしを追ひこして行かうとする男があつた。見ればかれは傘も持つてゐない。

わたくしは先づかれを傘に入れてやつた。かれは隣國から發つて長崎に行くのだが、昨日から食事をしてゐないと言つた。かれといつしよに雨のなかを四里ばかり歩いたところで、わたくしはこの氣の毒な旅人のために顔見知りの農家にかけてこんで握り飯をこしらへてやつた。そして旅人と別れて行つた。

思ひ出の話といふのはたゞこれだけであり、少年の誰れでも、こんな場合わたくしと同じことをするであらう。が、わたくしがその當時を思ひ出して感ずることはその旅人に對して、四里の間、そして別れてからも、いさゝかも疑ふことをしなかつたといふことである。

今日のわたくしであつたら同じことをするにしても、少年時の純な心で施すことはできないであらう。まことにさびしいことである。

幼い子や少年たちの施物には愛の眞珠がかゞやいてゐ

る。大人たちの施物には疑ひの眼がまたゝいてゐる。

トルストイは聖書の讀み方について「わたくしは文字通りに聖書を讀んで、はじめて聖書の意味がわかつた。」と言つてゐる。

子供の心を持つて佛の言葉を聽くべきである。子供の心を持つて秋の雨を聽き、秋の自然に生くべきである。

明治大正時代に坂本紅蓮洞といふ人があつた。この人が島村抱月の追悼會の席で、こんな話をした。

「島村抱月にぼくが問ふたことがある。君のやうな正直で人を疑ふことを知らない者が地方に興行に出かけて行つたら、興行師にごまかされてしまふだらうと。すると島村君は——いやそんなことはない。こつちが正直に信頼してかゝれば先方も正直にやつてくれるよ——といつてゐた。」

疑ひのない世界、それが現世の淨土であらう。

念佛と衣食住の問題(三)

一言芳談抄講話

藤井實應

○有云。解脱上人、食事の氣味覺ゆるをいたみてとのへたる物に、水をいれたまいき。

解脱上人は法相宗の大家で法然上人の頃の人です。法然上人は一二二二年に八十歳で入滅、解脱上人はその翌年五十九歳で入滅せられています。山城笠置寺に住したので、笠置の上人ともいゝ、貞慶^{じやうけい}己講とも稱せられました。法然上人の新佛教に對しては理解が足らず、元久年間南都興福寺より上人佛教禁壓の訴狀の原稿を書いた人だといわれていますが、護法の念厚く南都佛教の復興をはかつた、法相律の達者であります。愚迷發心集等の著書があります。

解脱上人は食事の味のよさにとらわれるのを省みおそれて、味よくとゝのえられた食物に水をいれて食べられたといゝます。食物は生命を養う根本ですから、それに對する執着もまた強いものがあります。かつて私は上野陽一先生（能率研究の大家）にお目にかゝつた時、「私もこの年（そ

の頃六十歳頃）になつたので、金の問題や女の問題で迷ふことはまづ無いが、旅などに出てめづらしい御馳走に預るとつい食いすぎたりしてしくじることがある、食物よりの解脱ということはむづかしいね」と申されたことを記憶いたします。佛教で食事の際、五觀といつて五つの反省をすることになつていますが、その第三に食事の時、おいしい場合には食欲の心、まづい場合には瞑悲の心を起しやすいから、そうしたまぢがつた心をおこさぬということを反省することになつています。貪り食うときに、身體をこわし病の因になるのであります。私もしばしばその失敗の經驗をもつております。飢餓によつて死する人はいないけれど、食いすぎて死する人は多いとも聞いています。

序でながら五觀の意譯を申述べておきます。

一、此食物が食膳に運ばれるまでには幾多の人々の勞力と神佛の加護によることを思つて感謝いたします。

二、私の徳行の足らざるに、此食物を頂くことを過分に思っています。

三、此食物に向い、うまいからとて貪る心、まづいからとて厭う心を起しません。

四、此食物は私共の心身を癒す良藥と心得て頂きます。

五、此の食物は道を成就せんが爲にいたゞくことを誓います。

食事に對しての心得はこの五つの中にすべて含まれてい

るかと思われれます。私どもはこの心をまとめたかんたんな次の文を食作法としてとなえ、日常生活に實行致しております。

「ほんとうに生きんがために今此の食を頂きます。與えられたる天地のめぐみを感謝いたします。念佛三稱、頂きます。——食事——念佛十稱、御馳走さま！」

なお食事に就て思い出しますことは、かつて水野南北先生の「南北相法修身錄」を讀んで、食事のつゝしむべきことを教えられたことであります。

水野南北先生は徳川時代、相法の大家で、後には人の運勢などを判斷して百發百中といわれた人です。私は人相や手相其他によづて人の運勢とかを判斷してその指示によつて動くということは迷信におちいり易く感心しないのであります。南北先生のいわれる、食物をつゝしむことが運勢を開いてゆく大きな因であり、食物をむだにし、暴飲暴食するものは運勢がふさがつて禍の本となるという説は眞實であると思います。今その書物は戦災の際焼いてしまつて手許にありませんので、幾分文章はちがつているかも知れませんが、「命あれば食あり、食あれば命あり、是によつて命は食にしたがう……されば食は命を養ふ本にして、生涯の吉凶禍福悉く食より起る、たゞ恐るべきは食なり、つゝしむべきは食なり」の意を述べて食物を大切にし、つゝしむこと、粗食（菜食）と小食を人間幸福への基本條件と

してくりかえし、實例などをあげて述べてありました。

近頃栄養學も發達し、一般に普及して栄養食物を攝るようになったことは、よろこぶべきことであります。もつとこれを普及して國民の健康増進——即ちお互自らの健康増進——につとめねばならぬと思います。しかし栄養、栄養といつて餘りそれにとらわれると却つて栄養を失うことになります。解脱上人の用心あつて却つて栄養となり、食物よりの解脱が成されるでしよう。感謝して、よくかんで、與えられたものをきれいに頂くように、貪食しないように心がけましよう、そこに食物のとられようの解脱が成されると思ひます。

○播磨上人。衣裳を思ひ煩ひて、高野を退出す。大門の邊にて、鹿の冬毛におひかはりたるを見て、立かへりて

住山云云

○明遍僧都云、紙ぎぬにゑもんつくろう程のものはふかく（不覺）人にて有りける。

播磨上人というは性空上人のことか、又は播州の生れで高野にこもつた人であるか、明でありませんが、その上人にしても衣裳のことを思い煩うたことがあるのでしよう。高野を退出しようとしたのであるが、大門の邊りで鹿を見てその冬毛に生いかわつた姿を見て、感ずるところあり、立ちかえつて山に住して専心佛道修行に勵んだといふのであります。衣はもともと寒暑を防いで肉體を守る爲のもの

であつたのでありますが、文化が進むにしたがつて生活にはなくてならないものとなり、それに美を求めるなど、いろいろの意味が加わり、それだけに衣に對しての執着も加わりました。されば、明・清僧都も、紙衣を着るにも、衣服装束の着方などをとりつくろいかざるほどのものは不覺人だと戒められたのでありましょう。紙ぎぬというのは紙子ともいふ、紙にて仕立てた衣服で、もと律僧などはこれを用いました。女人の手を觸れないで仕立てらるゝからだといわれます。句佛上人の「もつたいなや祖師は紙子の九十年」という親鸞を讀えた句があります。鎌倉時代の僧も紙子を用いていたようです。衣裳については若い人々、殊に婦人はより一層愛着をもつようであります。衣裳道樂という言葉があるほど、必要以上にいろいろと流行を追うて新しい衣裳を求める婦人が我國にも相當多いようです。終戦當時の服裝のことを思うと近頃は何と美しくなつたかと驚くばかりであります、同時にその形もすいぶん變りました。衣裳を美しくするということも人々の心を和らげ、心まで美しくするということもありましょう、身分相應に着飾ることも身だしなみといわれるように、社會生活の上にも必要であります。しかしそれにとらわれるとき煩い悩みは深くなり、それが爲に罪をつくることにまでなります。外側は如何に着かざつても、内側の心が醜いようでは恥しいことです。内外清淨、心からの美人でありたいものであります。

す。衣裳への執着から離れることが佛道に精進する姿であるといえましょう。

淨土宗三祖記主上人は次の味い深い教を「決疑抄」下卷に述べておられます。(意譯)

「生きとし生けるものは、生れ出る時、その命の根本に衣食住の三つは具わつてくるのである。野の鹿を見なさい。草を食し、皮を衣とし、野邊を住家として、衣食住を求めたづねないけれども乏しいことはない、それと人も同じである、すでに因果必然の道理が分つたなら諂へつうて權門に近づきなざるな、唯天運の報に任せなさい。況や身命をなげ出して佛法に歸したものは、諸天善神もよく護つてくれ、法の災難を除き、神の祐け自在ならしめて下さるから、三寶(佛法僧)に貧しいことは無いといわれているのである。」

これは衣食住全體にわたつての心得べき大教訓であります。多くの人は衣食住がなくては生きてゆかれぬという不安があります、不安があるから一層衣食住に強い執着をもつのであります。しかるに大宗教は聲をそろへて「汝ら衣食のことを思い煩うな」と説かれます。「空の鳥を見よ」「野の百合を見よ」「イエス」「野の鹿を見よ」(記主上人)と教えられます。「肩あつて着ずということなく、口あつて食わずということなし」(大燈國師)と申され「道心に衣食あり」(傳教大師)と叫ばれました。

生きる因縁(生命)さえあれば、食べてゆくことができ

ます。飯を食べているから生きているのではありません。食べ物さへあれば生きていられると思うのはまちがいです。生きている因縁があるから生きておられるのです。食物を山とつんでも病人は少ししか食べられませんし、生きる因縁がなければ死んでゆかねばなりません。生命があれば自分の手許に食物は無くても生きてゆけます。誰か持つてきてくれるか、借りにゆくかして食物は與えられるではありません。食物よりも生命が根本です。だから三祖上人は「生れる時に生命の根本に衣食住の三つは具わつてくる」と申されたのであります。大切なのは佛法に歸依することであり、道心あることでもあります。明るく正しく生きゆこうと願うことであります。そこには必ず衣食が伴い、衣食も充分にその價值をあらわすことゝなります。

終戦直後、食物は不足し混亂のはげしかつた頃、箱生活という言葉がありました。食物を得る爲に持ものを賣つては食物にかえる生活をいつたものであります。その頃に私は所謂失業をして一定の収入は無くなり、衣食をどうしてえられゆくか、このようなことで今月の米代をどうするか、お正月は迎えられるであろうか、と明日のことを思い煩らいたがらも「明日のことを思い煩ふな」の聲を聞き「越すに越されず、越されずに越す」という文字通りを幾度も経験し、自らの信念薄きを慚愧しつゝも、これらの法語の眞實にしていつわらざることが信ぜられ有難く力強く仰ぎ得たのであります。そして今日まで五十餘年間のこ

とを思うと生きる因縁が與えられ、生かされてきたと申すよりほかないのであります。

要するに衣食住は生きてゆくにはなくてはならぬものですが、生きている以上は衣食住は具わつてゆくとの信念の下に、それが執着を離れるように心がけゆくが、眞に生きゆく者の大切な心がけであると思われます。眞に生きゆく即ち人格の完成（佛教）こそ、生きゆく究竟であります。衣食住は植物の根や葉のようなもので、花を咲かせ實を結ぶ爲には無くてはならぬものですが、その根や葉（衣食住）は花や實（人格完成）があつてこそそのねうちがあらわれるのであります。

その邊のこゝろをわが法然上人は、衣食住は念佛の助業であると申されました。

「現世をすぐべき様は、念佛の申されん様にすぐべし。念佛のさまたげになりぬべくば、なになりともよろづをいとひすてゝこれをとゝむべし。……自力の衣食にて申されずば、他人にたすけられて申すべし、……他人にたすけられて申されずば、自力の衣食にて申すべし。……衣食住の三は念佛の助業なり。……」

（禪勝房に示された法語）と御示し下さいました。念佛して極樂に生れ佛と成るのが淨土の教であります。それゆえ念佛こそこの世を過す最高目標であり中心であります。念佛申されるように過すとき衣食住其他生活の一切が念佛の助業となつてそれぞれ尊い意義をもつことになる。（續）

刹古 勝願寺のお十夜

藤田 寛海

月の光の冴えわたつた舊曆の十月十五日。この望月の夜にかけての十日と十晩、浄土宗の寺々で廣く行はれる念佛會を、普通「お十夜」とよんでいる。

極樂はいつも月夜に十夜かな

高く澄む月をほめゆく十夜かな

清く澄む秋の夜の月影は、ひとしほ人々にしみじみとした想ひを抱かせる。貧しいものも富めるものも、老いたるものも若いものも、生きとし生けるものは此の月の光に憩ひを求める。

そして、「月愛三昧」という言葉が經典にもあるやうに、佛の慈悲は昔から月の光に譬へられてゐる。「彌陀の御顔は秋の月」と歌はれ阿彌陀様の御縁日が十五日、即ち、望月の日とされたのもその爲め

であらうし、また「お十夜」が月の明るい夜を選んで行はれるのも佛の慈光に結ばれてのことであらう。

然し、曆も太陽曆になつて、世の中も移り變つた今では、「お十夜」は十月または十一月の十五日前後に、十日十夜ではなくて、二日或は三日間と期間も短かく行はれる場合が多い。

勝願寺の「お十夜」も、また毎年十一月の十三、十四、十五の三日間に亘つて行はれるが、最も特色ある秋の行事の一つである。

この勝願寺は埼玉縣の鴻巣町、つまり高崎線の大宮と熊谷との丁度中間にある檀林（謂はゆる昔の佛教大學）で、凡そ六百年もの長い傳統をもつてゐる名利である。中興の開山は浄土宗の第三祖記主禪師で、鎌倉の光明寺と同じであるが、ここの「お十夜」は「關東の三大十夜」の一つに數へられて、古くから有名である。

「關東の三大十夜」と云ふのは、この他、鎌倉の光明寺と八王子の大善寺の「お十夜」のことで、特に、勝願寺の「お十夜」は、また「とうば十夜」とも呼ばれてゐる。それは、參詣の人たちが御先祖様や有縁無縁の追善のために、或ひは、稼業の繁昌や家門の安泰を願つて「とうば」供養を行ふ慣はしだからである。

もともと「塔婆（とうば）」は佛舍利を安置した塔の意味で、佛を現はしたものである。従つて、「とうば」を造立して禮拜供養することは、私たちが惡業をやめて善業を修め、迷ひを斷つて眞理をうる根本で、その功德の深く大きいことは多くの經典にも説かれてゐる。

「お十夜」に参詣した人たちが、この「とうば」供養をすると云うことは意義深いこと、云はねばならない。

十一月十三日の夕刻、先づ開白の法要を以て「お十夜」は始まるが、それよりもずっと前、もう十一月の聲を聞くと近郷の人たちの間には「お十夜」氣分が漂ひ始める。と云ふのは、この「お十夜」には「刈り上げ」——竟り、田作りの一段落を祝つて、收穫を感謝する氣分が籠められてゐるからである。

すくひとれぬ十夜の汁の芋杓子

海道へ柚子のみそ匂ふ十夜かな

あなとうと茶もだぶだぶと十夜哉

と古い俳句にもあるやうに、秋の實りの數々を持ち寄つて佛前に供へ、大勢で一諸に齋食したことも、ずつと以前にはあつたと古老たちは語り傳へてゐる。

お供へ物を佛前や御先祖の靈前に供へて、飲食を共にすることは古くから總ての宗教儀禮の重要な事となつてゐるが、こゝの「お十夜」に参つた人たちは食事を共にすることによつて、どんなにか親しみを深め、また信仰を共にする喜びをもちえたであらうか。

此のやうにして初日を終つた翌十四日、東の空は白々と今日の晴天を想はせて、晨朝の法要を告げる大太鼓の音に明けそめる。

何萬と云ふ今日の人出を目當てに、町の商店は「お十夜大賣出し」の呼び聲も賑かに、こゝの「お十夜」は町全體の催しと云つた觀が

深い。

年々に繰り返される私たちの生活に、一つの區切りとなつて反省を促し、或ひは季節の改まりを感じさせる數々の行事の中でも、花祭り・お彼岸・お施餓鬼など佛教信仰に深く根ざしたものは多いが勝願寺の「お十夜」も、この地方の人たちの生活の一つのケジメとなつてゐる。仕立て下しの着物を着るのも、新しい帶をしめるのもこの「お十夜」であるし、腕や小鉢と云つた勝手元の小道具類を新しくとり換へるのも此のときである。日頃は無音にすぎた知人を招いて舊交を溫めたり、親類縁者を招いて赤飯でもてなし、常々の不義理を果すのも、勝願寺の「お十夜」のときとなつてゐる。

長い参道の兩側にはギッシリと、何百ともなく露店が並んで、樽柿を賣る店の多いのもこゝの「お十夜」の特色である。オートバイの曲乗りや蛇娘と云つた見世物も六・七軒客の呼び込みに大奮である。一丈餘りの大イタチの見世物が、たゞの板に血がついてゐるだけの「大板血」だつたと云ふイカサマなものはもう無いけれど、種々の見世物小屋は昔の淺草の奥山や靖國神社のお祭りを偲ばせて懐しい。一際大がかりのサーカスの小屋。最新歐米歸朝や空中大飛行とうたつた大きな轢り。毒々しい繪看板。ヂンタの黄色の音色。總ては大時代的だが、やつぱりかう云つた構へでなくてはサーカスらしくはない。人々はいづれも子供の頃の懐しい昔へと引き戻されるであらう。然し、その想ひ出を長く懷しむこともできぬ程の周圍は

雑踏である。人・人、そして人の波と雑音・噪音のルツボである。

正一時。町内の練り宿から稚児の練り供養が初まる。寶冠に狩衣、二十人の稚児たちの揃ひの姿も可愛らしい。七五三の祝ひに當る子供たちは、特にこの稚児になることに喜びと誇りとをもつてゐる。

導師を中心に二十人に近い隨喜の僧侶、そして稚児たちの行列は大通りを練つて大殿へとつゞく。

ほの暗い燈のゆらめき。禮讃の行道。嚴肅な、そして莊重なこの法要は「お十夜」の壓巻と云へやう。

涯しない人波を夕もやが包んで、中天にまん丸い月が上る。

露店のアセチリンに電燈。境内の雑踏の中に聳える大きな本堂では「おこもり」の人たちの踊りも始まつたらしい。

九間に十一間の本堂は人が溢れて、まさか

あら笑止、十夜に落ちる庵の根太

ではないが、さすがに今日は手狭くさへ感ぜられる。

四個所の大帳場では、塔婆を申し込む人、おみくじを引く人。總ては人に埋まつて、その人波の上の渡り臺をやつと歩くことができる。

晩秋の夜氣はもはや膚寒いのに、本堂の内は人いきれで汗ばんでくる。

花嫁も浴衣きてくる十夜かな

揃ひの踊り衣裳の年寄りの群れが、あちらでもこちらでも、手さ

ばき鮮かに踊つてゐる。

野良仕事も一段落ついた喜びと、また「お十夜」に參ることのできた楽しさ。阿彌陀様の慈顔がこのざわめきを靜かに見おろしてゐる。

祖父祖母ぢぢばばの京にも多き十夜かな

踊らせぬ娘つれゆく十夜かな

も、こんな情景をよんだのであらう。

踊りはいつ涯るともなく、第三日目——十五日の晨朝までつゞく。かくて十五日の早朝、結願の法要に列つた人々は、巍々として輝き給ふ佛の光顔を仰ぎ、伏して佛徳を讃嘆し、祖恩を偲びながら下山する。

月も既に西に落ちて、物門を出ると大通りには秋刀魚の市が立つ。おこもり歸りの人たちはいづれも秋刀魚を買つて歸る慣しだが、精進落しの意味でもあらうか。

勝願寺の「お十夜」を「さんま十夜」と云ふのもこのためである。世の移り變りと共に「お十夜」の形も變り、土地によつてその慣しも異なるが、常に變らざるものは彌陀の慈光であり、これを仰ぐ信仰の想ひは深い。

十方十夜み佛の前去りがたき

此法や花は降らでも初時雨

鎌倉光明寺に詣でて

大橋 俊雄



う。近隣から何萬となく善男善女がお参りする、そのお十夜が訪ずれるのも間近い。

丸ふなる月をかぞへて十夜かな

誰であつたかこんな句をよんでいた。陰曆十月十五日を心樂しみに指折りかぞえて、月が上弦から次第／＼に大きく明るく、まるくなつてくるのを待ちわびていた江戸時代の人達が目の前にほのかに浮んで見えるような氣がする。

お十夜が光明寺に行はれるようになったのは、八代目の住職觀譽祐崇が、明應四年（一四九五）時の帝後土御門天皇の召によつて、三七日の間宮中で阿彌陀經の談議を行い、その功を嘉せられて紫衣を賜はり、更に十夜法要を修したのが浄土宗で行う十夜の始まりで以來、それ以前京都眞如堂で行はれていたこの儀式を永く光明寺でとり行はれることを勅許されたのであつた。しかし、此年よりも十年程前の「文明十七年十夜念佛供養一結案」と彫られた板碑が、東京瀧野川にあるので、關東でも古くから行はれていた民間信仰の行事であつたらしい。

二

鎌倉の夏のカーニバルが終つて、鎌倉やその附近の人たちの一様に待遠しく思うのは、藤澤遊行寺の開山忌と光明寺のお十夜である。

この光明寺を開いたのは、浄土宗の第三祖

記主良忠上人と云うお方であつた。寺が開かれた當時の鎌倉は花やかな文化の咲きほころ土地であつたが、上人が千葉から知る人となかつた鎌倉に入られた頃は、衣食にも事かき、門弟たちは町へ出て商業に従事しなければならぬというような生活にあまんじなければならなかつた。その頃上人は自給生活をすゝめるために、自から弟子達と共に由比が濱邊の砂地に大根と波多菜の種をまいて生活の手助けとしたのであつたが、これには地方漁民たちへの蔬菜自給という意味もあつて、次第に栽培され人々に如何程の利を與えたかはかり知れない。今でも材木座から小坪の海岸一帯にかけて、淺春に青々とした自然生の少女のような愛らしい大根を見出し、これに交つて波多菜を散見することが出來よう。里人は古くからの習はしであろうか、その意味を知らずに、記主大根とか、記主菜と呼び、その菜は煎じて飲めば風邪がなおるとよろこばれているが、これにはこんないわれがあるのである。

三

「關東總本山」の石標に導びかれて一歩足を垠内にふみ入れば、潮風にたえしのびて、

老松とよき階調をなして總門が、山門の壯大さとの對比もよろしく、何等の色彩もほどこされていらない素朴さの中に、あたりの青松を腰帶に、天照山岳を背後に美しい風情をそえている。

總門をぬければ右手の松原に家があり、これが所謂善導塚である。その塚には次のような物語りが秘められているのだそうだ。

良忠上人の師匠であつた二祖の聖光上人が九州は筑後の善導寺で浄土宗をひろめて居られた時に、その念佛が正しいことを證明するために、支那から善導大師のお木像が僧となつて渡來されたが、この僧が船中で嵐をしずめるために書かれた名號が船板名號で、九州の善導寺には今に、それと云うのを傳えている。此の僧は舟からあがると、また木像となつて聖光上人がお持ちになつていたが、更にこの像を良忠上人に授けられたので、上人はこれをもつて關東に行かうとして、千歳川にまでやつくと、何と思つたのか經をよみながら、突如河に投げこまれたのであつた。時に上人は像に向つて「何處へなりとも有縁の地へ流れついて下さい。そして私は心が其處をさがし求めて法を弘めたい」と眞劍に祈願をこめて、弘法の地の先導をお願いしたので

した。その後、上人は信州から、下總しもそうに入り更に鎌倉に来て佐介谷で説法していた所、偶々由比ヶ濱に七日七夜光明が輝き、漁人の助けをかりて、善導大師の御像を発見したのであつた。上人の喜びや如何なるものがあつたでしようか、想像に餘りあるものがあります。その発見された位置が今の善導塚だつたと傳えているのである。

四

そんなことを考えつゝ鐘樓に目をやれば、元徳二年(一三三〇)の梵鐘が物寂びしくかけられていたが、これはもと法泉寺にあつたもので、梵鐘は鎌倉時代作品中の名品との由であるが、鐘樓も建築としては立派なものなのだそうです。土臺の石垣は内部に青銅のクサビとめ合せてあり、あの關東大震災にもビクともせず一分のすきすら生じなかつたと云はれる。この手法をまねてつくつたのが増上寺の鐘樓だとの話を最近誰人から聞いた。

大殿に參拜すれば阿彌陀如來は端麗で、しかも壯嚴の中に、笑みをうかべて恰かも生る如來にあつたかの如く、私を招き入れて下さつてゐるやうに感じがする。こゝに安置されている善導大師の木像は、もと衣には金泥で

阿彌陀經が書かれてあつたといはれ、二百年程前までは、「生」と云う一字がよめたと記録されているけれども、今は全く字を見出すことは出来ない。又近くに江の島辨天の像がまつられ、一寸異様な感もするが、これには何か戀物語か、ロマンスがあつたやうにも聞いたことがあるが思い出せない。何でも三度江の島から光明寺に流れつき、三たび目に神意によつてこゝに留めたという。

大殿から開山堂に歩を運べば、こゝには開山良忠上人の自作と傳える等身大のお像が安置されているが、その昔貧困と他教團のあつれきがあつたにもかゝらず、念佛弘通に一身をさげられた風骨が像の全身にみち、見るものをして思はず身を正さしむる。

廣々と、掃き淨められた松林の間に散在する堂宇は閑寂そのものの、中に、鎌倉的な簡素と壮大さとがあり、浄土宗東國の巨刹として嚴然とそびえたつてゐるのであるが、それにしては年月のふつてゐることは、あちこちに破損の箇所もあつて、如何にも痛々しい。何とか早く修理も施さねばと思うが、それもならぬらしい。

五

こゝで「法然全集」のこともあるので、傳法然書の寶物拜觀を願えば、御法主はあいにくと不在中で致し方なく、又の日を期したが成實僧正御在世の折、お世話になつた時寶物臺帳を手にしつゝ、「私はこの寺に來てから寶庫をあけた事もなく、又執事から寶物の引き繼ぎもして居らない。先程、執事より聞けば終戦後ほとんど整理されて居らぬので、特定のものを見せてくれと云つても應じられない。所で一應整理したいと思つていた矢先でもあるので、君が調べてくれないか。君の事は吉川から聞いているから」とのお言葉、願つてもない事であるから、喜んでお引き受けした當時の事が思い出されてくる。吉川氏は私が藤澤に居つた頃から、おつき合ひしている時宗の僧で、僧正の女婿に當り繪をよくし最近「出雲のお國」を書いた御仁である。

再び境内におりたつて大殿に足をはこべば開山御手植と傳える檣柏（まきかしは）や檣木（まきぎ）は幾百年の寺の歴史を物語るかのように、ぼつんと立つているが、又それはそれだけに此の白砂青松の間に立たずんで御のりを説いたであろう事などを思ひうかべれば感慨無量なるものを禁じ得ない。その附近に、「記主水」と呼ばれた井戸があつた筈であるが、今一寸見當らない。その在所を聞いて見ると、「そうね、そういへ

ばあつた筈なのですが、見當りませんか。殊によつたら建物の下になつてゐるのではないでしようか」との御返事、その位置は本堂左手の所にあたる筈である。この井戸は記主上人が杖で地を突いたところ水が涌き出たもので、この水を寫經に利用されたと傳えられるものである。一體、鎌倉は水の悪い所で、飲料水に適する水の涌出は餘り見られなかつたらしい。だから五井とか十水とかいう名水が人口に膾炙され、もてはやされたのであつたが、此の記主水もその一つであつた。四時清冽で、時には地方民の眼病の洗水となり、又地方農民の雨請いの際の祭り水で靈驗のあつた水が、若しも枯れてなくなつたとすればおしいような氣もする。

六

一步、寺後の天照山に登れば一望のもとに相模灣を見下し、遙か彼方に伊豆半島が前方に長くつき出ている。近く材木座から由比ヶ濱一帯の白砂の間には、青松が點在し、雲仙ヶ崎の横たはつてゐる邊り、何時か日本史で習つた新田義貞の鎌倉打入の物語りや、源實朝が入宋を試みた逸話が思い出されてくる。何時の間にか建てられた中學校を右に見て、細い路地をぬつて開山良忠上人の御廟に詣で

る。中央に一段と高くましますのが開山上人の御墓で、以下左に右に歴代上人の墓地が並んでいる中、一寸珍らしい石でつくられた數基の墓石に氣がつく。これは龍宮石といはれるものだそうだ。これにはこんな物語りが秘められている。というのはその傳説の主人公は三十六代の觀徹上人で、上人は龍宮王の歸依をうけて、毎日龍宮城で中食にあずかつた。或日小僧が上人について龍宮に是非行つて見たいという野心を起して、高座にもぐりこんでいると、上人は高座のまゝに海水の中に入り龍王に食をうけられたが、時偶に小僧も龍王に發見されて饗應をなされた。この時將來されたのがこの龍宮石なのだそうだ。

七

さしにも廣いこの境内が、バスに運ばれて鎌倉と逗子の驛から送られてくる善男善女の群に、材木座の入口から本堂まで、終夜人で埋められ、人波に押されるお十夜が訪ずれてくるのも間近い。今では十二日午後から十三日早朝まで僧俗共に不眠不休の法樂が續けられる。こんなことを書いてゐるうちにも、山門兩袖の念佛講の打ち續ける鐘、本堂の引聲阿彌陀經誦誦の聲サーカスの聲が聞えてくるような氣がしてならない。

佛教保育隨想

内山 憲 尙

×

佛教の幼稚園や保育園でよい歌がない。作詞作曲ともにあかるい、しかも佛教的なものがほしい。よく「佛の子供」というのが歌われている。

これは大正七年頃に出た西本願寺の「サンブツ歌」の中にある、野村仁成氏の作曲のものであつて、歌詞も小學校中學校向きのもので「我等は佛の子供なり、うれしい時も悲しい時も、御親の袖にすがりなん」というのである、幼児には悲しい時はないだろうし、母親の袖にすがりなんというような抽象的な文句は幼児にはわからない。曲も四拍子短調でリズムカルでなくいくらか哀調を帯びている。

いつも保育の講習會で「この歌は幼児向きではないからなる可く幼児に與えない方がいい」と力説して來ていたのであつた。

×

ところが、先日自分の幼稚園から、この歌が聞えてくるので行つて見ると、一人の先生が幼児に歌わせている。新しく長野から來た先生である。僕は思わず苦笑してしまつた。よく話し合つたのは勿論であるが、この歌の短調なメロディが、若い先生方に受けられし

い。つくづく、幼児の讃佛歌の作詞作曲の難かしいことを思つたのであつた。

×

第三回の全國佛教保育者大會が催される、佛教關係の幼稚園、保育所が一九二〇年となつて話し合うところにこの會の意義があり、その出發は出来るだけ各宗の本山を會場にして廻つて、先生方に、こんな機會に各宗本山の參拜をしていただくことの意圖であつた。

×

この趣旨から、なる可く金をかけないでやること、眞に保育者のみでやること——顔や、つり合いなどで、保育のことを知らない、おエラ方をならべることがやめたい——、論議はやめて佛教保育の在り方を教諭や保母を主體として研究討論することなどが高くとり上げられねばならないと考える。

×

それから會期中に「何宗、何派」の懇親會というのが開かれるが、佛教保育大會の趣旨から言つても、なる可くこんな集りは持たれない方がよいように考える。

×

佛教寺院で經營している園であり乍ら、宗教的な保育をやらなところがあると聞いたその住職である園長は「そんなとらわれた保育ではなく、もつと大きい自由な保育をする」といつているそうだが、それなら、なんにも寺院でやることはない。

×

自動車やバスや、馬車での送り迎えの園がだんだん出て來たが、子供の人氣とりや、父兄のくだらない満足のために、商賣的な保育になることはこまつたことだ。なるべく佛教寺院經營のところではやらないで貰いたい。

×

佛教の保育施設は非常な數で増加しているありがたいことだ、今度は、保育内容の忘却である。特に園長さん方の御勉強——保育に對する研究——をお願いしたい。

(八月二二日長崎にて)

内 案 書 讀

龜井勝一郎著

愛の無情について

三笠文庫に收められた此本の最後に、河盛好藏氏が解説を書いている。

「この書物の解説を試みることは屋上屋の架するに等しい。なぜなら當代の評論家のなかでこの本の著者ほど論旨の明快な、敘述の懇切な、そして強い説得力をもつた人は他にえがたいからである……」

取りようによつては、龜井氏の著作は、平明率直で読みさえすれば心の琴線に觸れる関きがあるから、今更これをくどくどと解説する必要はないという意味であり、事實私も同感である。畫家はその修業の課程に於いて、名畫の模寫をするという。又龜井氏自身「讀賣」紙上の文學回顧談で、若い頃文豪の文章を筆寫したと書いておられる。私も、私が私なりに感銘を得た個所を摘記することにする。

る。此様な試みが果してよいのか、よくないのかはとに角として、今の私には、そして少くとも龜井氏の著作に關しては、これが私のなし得る唯一のことであり、同時にそれが一番適切な方法だと信ずるのである。

たゞ一言加えておきたいことは、數ある氏の著作中「愛の無情について」を取り上げたことに關してである。宗教又は佛教を語るものとしては「信仰について」「聖德太子」「大和古寺風物誌」など數々ある。だが此等のものは、本誌の讀者にとつては既に親しいものとなつてゐることだと思われる。私自身もその二三は手にし、深い協鳴を感じたものである。

このような考えから、私はここで比較的私達の思想圈と離れたものとして本書を選んで

みたのである。——もちろん龜井氏の思想體系を傾向づけてゐる深い宗教性は本書にも鮮明に描き出されてゐるが。——更にもう一つの理由は、たまたま「愛情」ということに就いて、現實的に思いを傾けてゐる自らの昨今の狀況が、否應なしに本書を手にせしめたのである。愛情無限を信ずる私として、どうしても愛の無情について知りたかつたのである。

序より

○現代にあつて、いかなる政治的黨派、思想的立場をとらうと、各人の自由であります。或る立場を選んで、自己を自由なりと認めるには事缺きませぬ。しかし自申の最大の敵は自分自身であることに氣づく人は少い。また眞の自申とは一の苦惱だと感じる人も少いやうであります。

第一章 精神についてより

○世の所謂大人は、必ず自己の體驗に優越感をもつてゐます。しかし體驗とは何か。この世に順應して行くかぎり、誰しも體驗はもつ

が、それは極めて狭い範圍の、受動的の蓄積物にすぎず、そのかぎりでは動物的なものにすぎませぬ。この體驗に思索を加へ、その意味をさぐり、形成し、變様することによつてはじめて人間體驗といふものが成立するのであります。

○疑ふとは變革し破壊する力です。頭腦とは考へる手であつて、これを以て自然と變革し行く生れるためには破壊しなければなりません。この意味での懷疑が考への行爲の中樞をなすのであり、精神の形成はここに開始さるるわけです。

○私自身にとつては、最高の師、最良の書とは私の迷ひを直ちに解いてくれるものでなく逆に私の迷ひを突き放して、一層ふかい迷ひの中に追放するやうな性質のものであります。しかし感動すべきは、そのときその師もその著者も、私もろとも、やはり迷ひの底へ身をおとしてくれるといふことでした。つまり私の身に即して、彼らもまた迷ひ悩む。かうした、人生の深さ、人間の不安なる状態を教へてくれるのです。最大の宗教家の著者から、私は屢々かういふ叫びを聞きました。「私

はあなたを慰めることは出来ない」。しかしこの率直な聲が、どれほど私の慰めになつたか。

○人間の生命とは何か。私は端的にそれは一念があると答へたい。即ち人間の一念が、人間の生命だと言ひたいのです。生物學的な生命もむろん考へられますが、人間的な生命の特質は、何ものかであらうとするその一念に存するに相違ありません。

○戀する男女は、戀することによつて言葉を失ふものなのです。……かうする時機を、重視しなければなりません。何故なら、言葉を失ふことは、心の充實を意味するからであります。言ふに言はれぬ思ひ、そこに人間の眞實がある、しかも敢へて表現しなければならぬ。その苦しさにおいて、我々は言葉の障礙と格闘し開拓し、換言すれば精神は自己を形成しようともかくわけで、言葉の困難の自覺が、そのまゝ人間生成の陣痛ともなるわけです。

○死とは、嚴肅に考へるならば、我ら人間がそれへ向つて成熟して行かねばならぬ一種の「完成」なのです。一人間の完成とは死。生

とは未完の死。妥協です。故に生について考へ、迷ふ、一念を形成するとは、死の練習といつてもよく、これが精神といふものの本質的な面目なのであります。

○迷信をばくめつせよと言ひますが、人生は迷信にみちみちてゐます。世道人心や衛生に害ある迷信は困りますが、人生の微妙、不可知に根ざす迷信は、一種の藝術なのです。その證據には、人は戀すると必ず迷信的となる戀の占を、私は一つの美として尊重してゐます。

○單純化による擴大によつて有名になり、同時に、一瞬にして忘れ去られるのです。つまり有名とは極端に膨張せる自己であり、それが極端であればあるほど、凋落もまたはげしく言はば風船玉のごときものであります。人はみなこの可能性に憧れつゝ、(野心、虚榮心等)大群衆の中を彷徨つて行く。では誰が「自己」の實體を、在るがままの相で注視してくるのか。誰が御身とほんたうの關心をもつてゐるのか。

○精神は、その本質上つねに「一」であらねばなりません。單一性がその本來の面目なの

であつて、複數化するにつれて精神は弱くなるものです。何故なら、危機と不安に對する絶えざる抵抗力である以上、複數のなかに埋没し去ることはその死を意味するからです。

○すべての宗教は、家族を捨てることを要請します。それは精神の嚴しい要請であると言つてもよい。古來わが國に行はれた「出家」も、精神の單一性の確保によつて、即ち純粹に一對一となつて佛に直結せんとする潔癖な行爲であつたと言へませう。一般精神現象としてみても、自己をもつことは、「心の出家」を始めることです。

○一粒の麥、地に墜ちて死なずばといふ言葉がありますが、精神とは地に墜ちて死ぬ一粒の麥なのです。それはつねに一粒であらねばならぬ。信において、愛において、さうなのであつて、様々の妥協や論理上の綜合を空想するのは、自己を二粒三粒と考へて、あちらにもこちらにも顔を立てようとすることで、それは終局において何ものをも持ち來らさぬでありませう。

第二章 愛の無常について より

○人間であるかぎり、愛とは巨大な矛盾であります。それなくしては生きられず、しかもそれによつて傷つく。或は、愛とは偉大な虚偽だと言へませう。これによつて人々はむすびつき、同時に最も深刻な敵對關係にさへおちいりかねない。それはいつかは欺くのです。他を欺くのみならず、己を欺く。われとわが身を窮地へ追ひこむやうな作用をもつてゐます。この上なく美しく、しかも恐るべきは人間の愛です。

○美とはまさに瞬間のものでありませう。愛の永遠性を斷言した美しき瞬間、これが愛の最も實際的な定義のやうに思はれます。愛の可能性とは永遠性の今と言つてもよいでせう。したがつて、すべて愛するものは、その心中のどこかに、幾分かづつは、死の誘惑をもつてゐる筈だと思ひます。いや、愛とは美しき瞬間における死であると言つてよい。……

○戀の行動の裡に、意識せぬ美しさが現出するのは當然です。「戀する人間をごらんさない。彼らはみな天才的に振舞つてゐるではないか」とトルストイの語録にあります。それは一種の現實遊離性を帯びると言つてもよい

のです。人間は現實から遊離など出来るものではありませんが、戀の束の間でも現實の一切を忘れさせる要素をもつてゐて、その未來の願算計算せぬ「思ひきつた瞬間」を有するものです。藝術と同じように、破壊と復讐の上に成立する快樂なのです。だから美しい。

○完全なる快樂、完全なる幸福、言はばそれ一方といふことは絶對にあります。幸福と不幸、快樂と苦痛、この相反する二つの性質は、根の方が深くからみあつてゐるやうです。矛盾相剋なくては、どちらも不可能で、この双方を平等にみる眼こそ大切ではありませんか。或る刹那、幸福であり快樂と感じても、永遠にこれを持続しえない人間性そのものからもさう言へるでありませう。快樂と無常は双生兒なのです。

○古來快樂を歌つた詩人のすべては、常住の死をみつめてゐた人達であり、死を歌つた詩人のすべては、快樂を深く味つた人達だつたのです。

第三章 罪の意識について より

○戦争反對を、政治的に扱ふだけでは、戦争

は避けられませぬ。平和のスローガンは、スローガンであるかぎり、忽ちその周圍に集る群衆人間の育成となり、それはその反對に轉化する可能性の育成ともなりやすい。戦争の危機を、精神の危機としてみようとするのはこのためです。

あらゆる國の、あらゆる人民の一人一人に向つて、「あなたは戦争を欲するか」と問うたならば、最後の瞬間まで、おそらく答へは決定的でありませう。過去においてもさうであつたと思ひます。しかも戦争が起るのは、一部野心家の策動だと言ひますが、それに乗ぜられやすい「自己」の現代的性格こそ問題なのです。戦争を起す責任、戦争の原因は「自己」にある。世界情勢の分析にもまして重要なのは、文明人たる「自己」の研究ではありませんまいか。

間内における最も熾烈な相剋であり、宗教もまたこの相剋裡に悲戦苦闘するもので、勝敗の鍵は人間には與へられてゐないといふのが事實かもしれませぬ。

○巨大な生命とは、巨大な矛盾であります。それは死に至るまで平安を缺く、様々な欲望の天國と地獄であり、争闘は凄惨を極むると言はねばなりませぬ。神と惡魔との結合體といはるる人間戰場において「罪の意識」とはその一方の巨大な子とりごではありますまいか。

○すべての宗教は、その根幹に罪惡感を有し病者の自覺とともに、發心の二大動機を形成してゐます。發心がなければ、罪の意識も明確化しないことは事實です。換言すれば自己否定の苦に立つと言つてもよい。惡が人間性の一面であるとしても、罪の意識はこれを一面とみず、全面とみて、全面的に自己を否定しようとするが故に、罪の意識と言へるわけです。

○神佛は、罪ふかきものに救ひの手を述べるといふところから、今度はわざと罪を犯すといつた行爲も生じます。自己を罪なきものと

する偽善者に對して、自己を罪あるものとする偽惡者が生じるのです。ことさらに或る犯罪を計畫しなくとも、日々の些々たる罪をいつくしみ、罪の溫存を志すという奇妙な心理状態におちいりやすい。罪を誇るのです。

○親鸞にとつて、罪の意識とは自己の意識でなく、彌陀の賜りたる意識となる。さういふ意味では、この意識において既に救はれて在る筈ですが、同時に賜りたるものなるが故に一切の自己救済は拒絶されます。親鸞は、絶望に絶望した人です。苦行流離しつつやがて如來の誓願裡に在る自己を、自己ならざる自己を、換言すればかく在らしめられた自己を歡喜して受けとるのです。したがつて罪の意識は、ここでは感謝の念佛と化するのであります。

○奈良の法華寺にある十一面觀音は、光明皇后をモデルとして、天竺師文答師が制作したと傳へられてゐます。皇后は天平の華とも仰がるる美貌の方であらせられたので、この御姿に伺つたときの文答師の心は、信を思ひつつ、また美貌に惑うたであらうことは傳説からもうかがはれるのです。また、現存する十

一面観音の魅惑的姿からも。唇を朱に染めた
 豊麗な顔、ややふくらみを帯びた豊かな胸、
 兩腕のなまめかしさ、姿態は妖艶とでも言ひ
 たい美しさにあふれてゐるのですが、作者は
 佛體であることを忘れて、女體に惑溺した利
 那がなかつたとは言へますまい。それが「罪」
 として自覺されたとしても、この罪なくして
 はこの美しい観音像は出来上らなかつたであ
 らうことも事實と思はれるのです。

終節 永遠の凝視 より

○救ひはどこにあるか。我々の心は常にこれ

を叫んでゐます。私も救ひがほしい。しかし

人間研究の結末は、救はれざる存在であるこ
 とを明瞭に證明してきます。私は「救ひ」と

いふ言葉が實は恐ろしくて、自分の口から言

ひたくないのですが、敢へて言ふなら、たと

へ「救ひ」の手が差しのべられようと、救は

れてたまるものかといった反抗にも似た氣持

が起つてくるのです。永遠に救はれざるもの

永遠に赦されざるもの、人間の實在はこれを

確證してゐるやうに見えます。……

○大慈大悲とは何か。それは世の所謂あはれ

みでもない。同情でもなく、赦す赦さぬの間
 題でもない。人間的愛の不連続性に對する、
 これは佛性の連続性であり、一人間を永遠に
 凝視してゐてくれる明晰の眼なのです。人間
 社會に在つて、誰が永續的に瞬時も休まず自
 己をみつめてゐてくれるか。親子と戀人かも
 しれませぬ。夢とは永續的凝視力なのです。
 しかし人間にあつては、親子戀人の間ですら
 やがては途ぎれる。私はこの寂寥のうちに佛
 性の凝視力を仰ぐのです。永遠の愛といふも
 のがあるとすれば、それは永遠の凝視でなけ
 ればなりません。

* 本稿は角川文庫（昭和二十八年五月第五
 刷）一六五頁定價六十圓によつたが、こ
 の外角川書店版昭和文學全集第十六卷に
 も收められているが、後者は文庫本の中
 の第三章罪の意識のみで前二章は省略さ
 れている。これには武田泰淳氏の解説が
 ついている。（竹中）

宗教人ハイライト

本誌特輯のため休ませて頂きます。

（編輯部）

○ 特選幻燈機（〒500 円）

マスター S 300 (750W)	14,500円
マスター・ルックス (500W冷却)	24,800円
エ・ルモ (300W)	16,900円
ベスタス ~ 35 (300W)	14,500円
其他各種	

○ スライド

童話・社會・理科等各種

○ スクリーン其他

◆本會代理取次（一割引）

カタログ一報送ります

文部大臣賞
二年連続受賞

F.F.D.

スライド

内 案 書 讀

J・ネルー著

インドの發見(上)

此書は現インド首相J・ネルー氏が、一九四四年四月から九月の獄中生活の中で認められた。氏のインド觀とそれに伴う人生觀の開陳とが、なめらかな筆と豊かな内容とで讀者の心をしつくりととらえる。

時恰も第二次大戰の連合軍側の反撃に轉じた時で、ノルマンデー上陸、パリ奪還、サイパン上陸、又、ガンジー釋放という狀勢で彼等インド志士長年の宿望もあと一步という時であつた。彼は淡々と心中期す所を信じ、靜かにインドの偉大なる流を反省しつゝ、純粹なインドそのものを求め、考え、又、同獄の哲學者達と論じ語らひ、この一卷の書を物

した。我々は、ネルー首相の國內政治及び國際政治に於いてもかけひきのない、いわば靜かな態度とでもいうべき深さを感じるのであるが、——特に我國近來の政治の貧困を見せつけられると、その原由の一端を何かしら、この書で理解がいくような氣がする。特に佛教徒として、佛教の母國の事は、我事のように思われる。

○彼の人生哲學

しからば、ネルーは佛教者かと考えるのは餘りにもインドを知らなさすぎるので、そういう方は、先ず一讀認識を改めてほしい所である。彼は「神とは私には信じられない多くのこと」だという。そして、マルクスの理論の中にも好ましいものを見る彼である。そうかといつて手段をえらばぬやり方には反對でガンディージーが、手段の正しさを強調したこと、つまり、公的政治的活動に倫理的規範をもつていつた事に絶大の同意を持つてゐる。つまり、一種の既成の與えられた原理とか、神というものには批判的であり、むしろ不完全ではありつゝも絶えず發展し、そのために自己をも滅して自己を生かさんとする

たくましい人間精神そのものの中に、神に似た或物を感じ、之を依所としているようである。

やはり、之は大インドの思想の根源をなる宇宙我と人間我との一致を唱導するベーダンタ哲學のその人間我に自己の心を落つかせておるようにみかけられる。

○インドの探究

今や英國統治の後をうけて獨立すべきインドは、數百の國語をもつ幾多の民族の色分けを持つてゐる。しかし、それは、とにかくインドそのものとして何か一なるものを持つておるはずである。かくして彼は「インド」を求めつゝ、讀者の前に民族思想文化の各方面に汎つて、インドを紹介する。いわばインド文化史というべき一面を有している。

之は學術書でなく多少の問題は免れないにしても、少くとも、肩のこらぬインドの紹介は、面白くよませてくれる。一應の事は之でわかるし、殆どのスペースは之にさかれてゐる。たゞ、あくまで之はインドの探究という事に主眼がおかれてあるのであつて、隨所に見かけられる母國インドへの憧憬、期待、誤

解の釋明、愛情といったものを除いては價值がない。神・宗教といったものに全面的に信服しかねる彼も、インドの人である——、最愛の妻カマラーの灰、をガンガー河にそそぐ彼である。

○佛教について

前項の一部として當然佛教の事にふれてあるが、彼が佛教を如何に思つてゐるかは、我々としては、興味深い事である。

それは、「佛陀の教訓」、「佛陀物語」、「アショカ王」、「佛教のヒンドゥー教に與えた影響」、いかにしてヒンドゥー教はインドにおいて佛教を吸収したか、「インドと中國」、「佛教哲學」等の各節に特に取上げられている。

この普遍的で絶對愛を説き、カースト（階級制度）を認めず平等を説き、神や來世に言及することのない佛陀の教は、ネルーをしてエドウィン・マノーノルドの『アジアの光り』を愛讀せしめる事となつた。

しかし、彼は、佛陀の否定したはずの佛陀を神棚に祭り上げ、厭世を説く風には批判的である。そして、彼としては佛陀は遠くない所で、我々の耳にさゝやき、鬭争から逃避せ

ず、人生の中に生長と進歩を増大する機會を見よと告げていることを信じてゐる。

而して、かゝる完成された典型を生みだしうるインドは、知識と内的の力を深く貯えてゐるに相違ないとしている。

佛教王アショカについては、かの全インド平定のため、カリンガ征服に伴う恐るべき殺戮を聞いた王は「史上戰勝を収めた君主や指官の中で唯一人彼は勝利の絶頂にあつて、戰爭を放棄することを決意した。……彼の心は佛陀の福音の影響下に、他の分野（人の心）における征服と冒險とに向つたのである。」として、強制のない佛道を活潑に行い、ウエルズの「幾萬の君主の名の中で……殆どたゞひとり輝く、星のごとく。」と言うように、佛教王アショカを語る。おそらく彼のあゝいみでのホープでもあらう如く。

○インドの永遠性

インドの今までの外敵の侵入に對してインドが終局的に自主を確立しえたことをのべ、將來もインドの自由の永遠なることを信じ、愛情をもつて守り立てゝいこうという誇らかな愛國心が輝いている。

過去、アールヤ人、アレキサンダーの大軍、フーナ、アラビヤ人、そしてイギリス人と何度かの侵入に對しても、インドは常に吸収同化か、もしくは驅逐によつて、依然として、インドでありつゞけた。彼は詩を引用して、この事を語つて曰く、

東洋は疾風の前に低く首をたれぬ、
忍耐強く、しかも深き侮蔑をこめて。

大軍のとどろき去るにまかせ、
それはやがて再び思索に沈みつ

要するにネルーの考方、見方が、インド史を通して出てゐるものだが、一面インドについて認識を新たにする點が少くない。

（岩波書店、昭和二十八年十月二十日
發行、辻直四郎・飯塚浩二・嶺山芳郎
共譯「インドの發見」（上）四二〇圓・
A5、三九四頁、（下）は近刊の由なる
もまだ出ていない）（龍海）

×

×

×

×

佛教はこれでよいか

僧俗による座談會

佛教は、口ぐせの様にねむつていゝとか無能であるとか、新興宗教に壓倒されているとか、巷間の噂は様々である。

果して、佛教は巷間で言はれている通りか、或はそうでないか。又佛教の今日爲すべき事は何かどの様にすればよいか等問題は多い。これ等の問題について、僧俗の人に大いに論じてもらつて佛教の在り方を考えてみよう。

寺を離れた事業は意味なし

E 話題として、寺院と經濟について如何でしょう。昨今、寺院經濟は底をついている

爲、大分色々の事業をやつたり、務めをしたりにしてはいますがね。この點大きな問題だと思いますがね。この點では、幼稚園等非常によいのではないでしょうかね。

G 今日の事業として、一番當を得ているでしょうね。

E X 寺院の如きは、幼稚園が出来た爲、非常に明るくなつた感じがありますね。

B 確かにそうだ。特に二つの面でその事が見られるね。經濟的な面と、生活そのものに活氣が出て來たと言う具合にね……。

E この點はどうですかね。幼稚園をやる事に依つて、寺院經濟を大いに立て直すと言

う事は、

B それはいかん。幼稚園が主となる様なことでは、あくまで寺院の事業としての幼稚園でなければ駄目だ。そうした面だけで幼稚園を考えているのは、大間違いだ。

F それではそれに依つて、積極的には、どう言うものが興えられると、言うのですか

B 教化が完全に出來ている。子供の教化子供を通じての社會の教化、その家庭を通じての地域教化。この三つのことが出來ている

E 壇家の方ではどうですか。

H 幼稚園など有難いですね。寺を離れて務めに出られる等は、何となく厭です。い

つ行つても住職が居り、然も、その中で生きた佛教活動が出来ている等はよいですね。

C 全くその通りだ。外に出る事は、よくないね。寺をそつちのけにして、努めている等、全然駄目だね。

D 役場等によく務めている農村寺院等駄目だね。あれでは佛教も捨てられますね。やはり、寺あつての住職だからね。

やれば出来る寺の經營

C これは一寸別な類だがね、或る禪寺等

で精進料理の席貸をしているのがあるね。なまじつかの料亭よりよいそうだよ。ただ、その席を開く前に必ず、住職の説教を聞かねばならぬのだよ。これ等、うまい經營だね。今までさびれていた寺が、もりもり盛り返しているね。

B そう言へば、こんなのもあるね。さびれた寺に進んで住職になつてね、毎日必ず一軒乃至二軒壇家めぐりをする。そして、夕食を家族と一處にする。それを毎日繰り返す。

三十軒でも、一月に一回は必ず行くことになる。これで一年足らずで完全に寺の經濟をもり返すに至つたと言ふんだよ。これ等、積極的な教化だね。やれ務めだ等と言ふより、本當は此處に來なければ駄目なんだね。

A その點では、僧侶の拱手傍觀で駄目だね。

D 何でもよいから、寺を中心にして、活動すれば、自から經濟も潤おうわけだね。何もしないで、困つた／＼言つていても駄目だね。

寺の本堂は公共物

D 最近色々の新らしい建築の本堂が出来ますが、これ等どうですか。

H 私の寺など、全く近代的な本堂を建てたのですが、これ等は、寺の本堂だ等考えていては駄目でしてね。私等住職に云つてやるんです。人は私が集めますから、この本堂を大いに活用して、教化して下さいとね。

D それでお宅の寺の住職はどうです。

H 全くよく活用してくれます。ただ、一般的に云つて、教化力のない住職がいますね。これ等は猫に小判ですよ。(笑)

切角よい本堂をつくり、人を集めてやつても、確な教化も出来ないじや、駄目ですね。その點もつと坊さんが活躍しなければね。

僧侶はお高く構えている

E 僧侶の問題はどうです。

C 寺の住職ともなると、お高くとまりすぎるね。インテリのような顔をしてね。だから何をやるにしても、何かインテリの對象としてのみ考えようとする。インテリで結構だが一歩進んで、もつと大衆の中に入らなければ駄目だね。

A 全くその點は同感だね。大衆のもとめているものの中に、積極的に入ることだね。例えば、現世利益的なものを求めている場合たゞそれを傍觀するだけでは、大衆はついて來ない。

E そんな所に新興宗教が榮える理由があ

りますね。大衆の求めるものにハッキリ食いつて行く。

B この點佛教の中々難しい所だね。だからはずきり、二面があつてよいのだと思うね。邪教に走る事は戒めねばならぬが、大衆の爲の佛教、インテリの爲の佛教とね。別に異なつたものではないが、そうした要求を満す方法は、夫々について考えられる事が他にあると思う。眞言等の祈禱も、そうした點を生かせばよい。淨土にそれが駄目だと言うこともあるまいと思うが。

C この點佛典の和譯などもあるね。何か和譯することが佛教の近代化の一つだと思つてゐる様だが、必ずしもそうでない。そしてむしろ大衆に、有難いお経は、和譯しないままのまゝのものなのだからね。この點いつも失敗してしまつてゐる。

B その點では、二つあつてよい。和譯も結構、生のまゝのも結構、そして、それぞれに適するものを生かして行く。たゞ、和譯でも、最後まで完成せずに消えて行くから駄目

だ。初めから完全なものなど、出来ないのだから作つたものを育て、行かねば駄目だね。

佛教徒は活躍している

しかし缺けたものがある

A 皆駄目だ／＼と言うがね。(笑)

佛教徒は仲々活躍してゐるんだよ。例えばK市の例でね。社會事業に當つてゐる市の委員をしらべたら、三割までが僧侶なんだよ。これを全國的にみると大變な數だよ。

B それは確かだ。T市の幼稚園等も、佛教徒で出来てゐるものの方が遙かに多いしね、又司法保護委員等斷然多いよ。

A 所がね、缺けたものがあるんだよ、それはね、横のつながりだよ。點はあるけどね線がないんだよ。點を結ぶ線がないんだよ。

この間も、朝日新聞に投書してゐた人があつたがね。僧侶は運動しないと言うが、各所ではやつてゐる。たゞそれが横に結ばれていないとね。同感だね。

C この點について、どんどん全國的な統

計を出してゐる必要があるね。そうして、これを大いに宣傳して、社會の人々に知らせる必要があるね。

全日佛のすべきことは

E 最近全日本佛教聯合會か何か出来ましたね。あれはどうですか。

B 佛教會館なんか造ることを又考えるだろうが、そんなこと、下の下だね。末梢的な仕事だよ。それより、先程の話の様に、佛教が今どんな事をやつてゐるか、全國的に調査し、統計を出すことだね。誰か言つたが、そうすれば決して佛教が寢てゐない事が一目で分るよ。

G すべての計畫は、それから出發するところになりますね。

F それとね、本當にこれが佛教を代表する機關であると言う事が必要ですね。例えば何か問題があつた時に、佛教側の意見はどうですかと言つたとき、佛教ではこうした考えであると發表し得る機關としてですね。近江

絹糸の問題などでも、あれはどうですかと來られたら、はつきり發言出来る機關がある事が必要です。

G 對共產イズムの研究なども、この機關で研究させるべきですね。

B 要するに、和して同ぜぬ事だよ。色々な宗派が集るわけだがね。それが和して一つの仕事をどん／＼やる、しかし同ぜずに。それは夫々の宗派の持味もあるんだから、その方向で生かせばよい、和することもしないで何も出来ぬわけだ。

C 吾が宗派こそは、天下の法王となると言う様な考方では、何も出来んね。

F 全日佛も、その意味では、大きな仕事の色々ありますね。椎尾、友松兩氏は果して完全になし得ますかな。

B 今まで言つた事を、實踐すれば出来るよ。(笑)

A 各派共通の儀式も出来ぬ様では。佛教界の和もへちまもありやしないよ。

C 浄土一宗でさえ、下手すると、共同の儀式が出来ぬからね。研究心が足りんよ。

F 大變色々と有難うございました。

本誌にしばしば名隨筆を寄せて、讀者に深い感銘を興えている女優村田嘉久子女史(法名覺心尼)は、この度、演劇協會(會長久保田万太郎氏)から多年にわたつて日本演劇に盡した功勞により、表彰されて、その表彰感謝の式が去る八月二十六日、東京歌舞伎座で盛大に催された。女史にとつての喜びはもとよりであるが、われわれ同信の喜びもまたこの上もない。

女史は帝劇第一期の女優として十九歳で初舞臺を勤め、以來、四十餘年間、歌舞伎に新派に新劇に、極めて藝域の廣い活躍を續け、今もなお舞臺に放送にテレビに出演している。

村田嘉久子 女史表彰感謝 謝さる

その功績が認められて今回の表彰となつたわ

けである。日本演劇協會は三年前に、俳優を除いた劇作家、評論家等によつて組織された團體で、毎年、演劇人祭を行い、その都度演劇功勞者を表彰する。

女史の話によると、今度の表彰は、協會から約三千人に對してアンケートを求めて候補者を選し、そのうちから三十人を選定し、更に十人に嚴選し、最後に二人を選したのだそうである。もう一人は市川荒次郎丈である。表彰狀には、「日本演劇文化向上の爲、貢獻せられたる御努力を深く擲い茲に表彰いたします」とある。

女史は演劇に盡す傍ら、道心深く昭和二十年、出家して椎尾大僧正から宗戒脉を受けた。權律師准輔教である。「有髮の尼」を堂々と正面からかざしている演劇人である。争わず食らず、信念によつて歩いてきた人である。

鈴木大拙著

読書案内

よみがえる東洋

かつて西田博士が「鈴木先生は日本の寶だよ」と云われたそうです。その博士の最近の書よみがえる東洋は文章ににじみ出る味のよさは一讀した後にのこる。この味は博士の人格であらうし、根底に強い佛教的信念をもっている佛教の味であらう。

この書はいくつかの論文がのせられて居りますが、その一つをとつて見ても、佛教がにじみ出る味がある。

現代の一番心にかゝることはやはり何といつても人間性の喪失であらう。文化が、文明

が進歩し、發達すればする程そうなのではないかと思われる。従つて人間性の回復は極めて重要な問題である。今や人類は自由と創造性とを失つて、それが巨大な機械の一部と化しつつある。

人間の不安はこゝにある。そこには個性もなければ人格もない。獨立もなければ、自由もない。自主性もなければ、高度な精神性もない。鈴木博士は高度な精神性、或は宗教性を靈性といつてゐる。

人間のものはすべて合理性でとらえられる

ものではない。「吾々は自己の存在を發見する場所、あるいは狀況というものを理解するためにはまずわれわれ自身が立却している立場というものが問題になるのであるが、われわれが自己に正直であり、忠實である場合にわれわれのすべてが經驗する議論の餘地のない確實な事實がある。それは、われわれ人間は一人々々、自己を超越せんと欲する欲望をもつており、また自由であり創造的であるという氣持を心底から味わいたいとねがい、現代の哲學者のあるものが「存在の神秘」とよぶようなものを體驗しようと欲するある内的衝動をもつてゐるということである。そしてわれわれは「認識の扉」を徹底的に洗いきよめて、それがあたかも一點の曇りもないまでにみがき上げられた鏡を、たがいに向い合せて立たせたように、一切の「存在の神秘」に直面することを切にのぞんでゐるのである。

このことはわれわれの存在を信仰が可能にすることである。(讀賣新聞社發行・二二〇圓)

(齊藤昭俊)

讀書案内

日本道德思想史

—家 永 三 郎 著—

「家永史學」と稱せられる氏獨得の國史の處理が、或る觀點に立つて纏められたものの一つが本書である。

千數百の引用句を本文中に生かしつゝ、客觀的な資料を集合離散して構成された本書は、それ自體、氏の言う道德思想史の百科辭典とも言ひ得るもので、氏の讀書の博覽強記には驚く外ない。

こゝに言う道德思想とは、極めて廣い意味のもので、「學問、藝術とを除いたすべての人間のはたらきを包含するもの」とされ、政治も經濟も、その意味で「廣義に於ける道德」と規定する。

更に宗教に對しては、

「嚴格な立場からいふと、人間的な道德の否定の上に立つといふ點で全く別の次元のものとも考へられるが、宗教が道德を、たとひ否定的にせよ、媒介しなければ成立しないとするならば、宗教も亦道德と重り合ふ面をもつであらう。」

と考え、そうした意味で宗教思想も亦、道德思想史を構成する重要

な分子と見なされている。

しかし、本書は、そうした立場からあらゆる部面を、考究しようとするのでない。各時代にはその時代の最もな擔い手となる階級である。この階級の道德思想史を分析する事は、自らその時代の道德思想史を解明することになるとする。

かくして、氏族階級（上代）貴族（平安時代）武士（鎌倉時代）町人、農民（江戸時代）市民（現代）と大まかに代表的階級を選んで解明し、別に「僧侶の道德思想」を特記し、國史全般をつらぬいて考究している。

夫々については、家族道德思想、政治思想、階級意識、宗教思想、經濟思想として考究され、これを總括して、道德思想史と稱しているのである。その意味では、極めて特殊な立場に立つた、特意的な見解であるとも言ひ得る。

中に於て、氏の言う宗教思想とは「現世の人間生活にどれ程の價

値を認めたかと言う點に主眼を置かんとするものであるが、果してこれだけで宗教思想が解決されるかは、勿論問題がある。そして、やがてそれは、宗教とは何ぞやと言う事にまで進まねばならぬであろう。たゞこゝでは、こうした觀點に立つての一つの解明として見るとき、多くのヒントを與えられるものがある。

第五章の「僧侶の道德思想」は

①出家意識

②出家精神の喪失

と言う二項の中に、國史全般をつらぬいて考究されている。氏が常に日本の佛教に大いに關心を寄せている事よりしても、充分理由のあることである。

そして、この問題は、出家と言う事が僧侶の出發であり、締結であるとして、

「僧侶は出家である。出家であるといふ自覺が僧侶の實踐生活の根本的な規範となるのであり、この自覺がはつきり出てくるときそこに僧侶独自の實踐哲學が形成せられる」

として、佛教渡來より、今日に至るまでを通觀する。

しかし、氏に言わしむると、

「俗權に對して『超然』として、之を『冷眼視』するが如き精神は、すでに數百年前より日本の佛教界から姿を消してゐたのである」

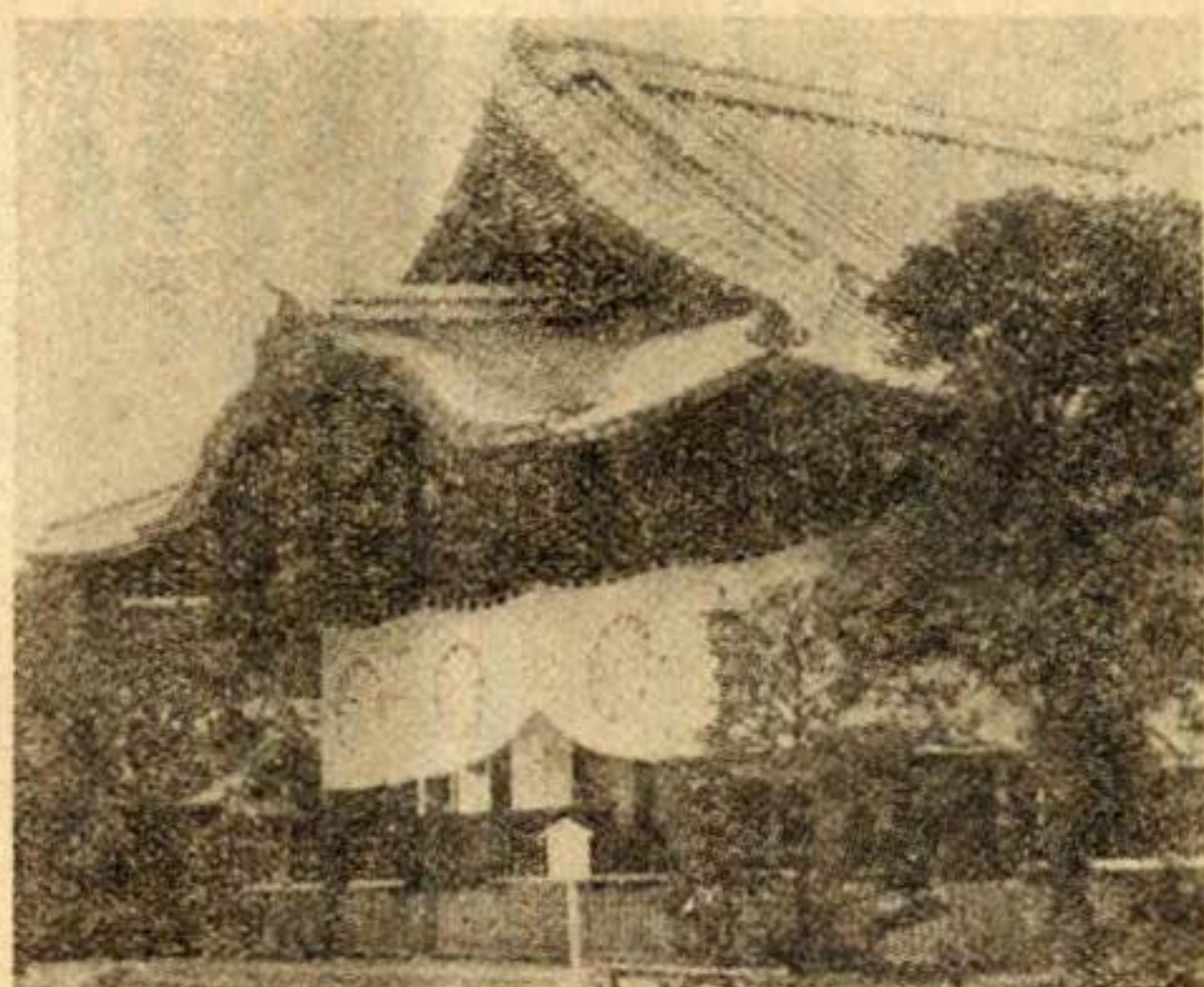
と結論し、更にそれは、單に數百年前のみならず、佛教傳來以來日本佛教は俗權との關係に於てあり、この意味で、出家の實踐は殆んど爲されなかつた事を認めようとする。

然し、唯僅かに、鎌倉新興佛教のみが、そうしたものを離れて、「現實否定の精神が沫溢し」そして、やがてそれは「現世の生活の價值を一應全面的に否定することに依つて、かえつて現實を勇敢に生き抜く、といふ逆説的な生活態度が成立した」として、法然、親鸞、日蓮、道元等を高く評價している。

女人成佛説の如きも、こうした出家の自覺が、平等の原則に於て實踐された「身分階級の差別の無視」であるとしている。

これ等の諸説には、勿論是々非々はあるであらう。しかし、時代と共に流れる思想は、たゞ一つの記録なり、一人の語録のみにては把握出来るものではない。又總てが錯綜する所では、現實的な思想の動きは、極めて漠然としていて、捉え難く、どうしてもある觀點を建てねばなるまい。こうした意味に於て、廣く長い日本の道德思想をある角度から俎上にのせた切れ味のよい概説書として、一讀に價するものである。

そして、更に、「家永史學」なるものが、日本佛教を、どの様に見どの様に處理しようとするかを見ることは、極めて興味あることである。(岩波全書、定價、二六〇圓)(安居香山)



雨中に續く参拜者

國民精神昂揚の爲のシンボルとされ、國の柱の靈魂靜まる所として、春秋二季の大祭には一入その賑わいを見せていた靖國神社は、今どうなつてゐるであらうか。これは、誰し

靖國神社の昨今

編輯部

もが知りたいものの一つであらう。特に戦後反動的な嵐を受けて、軍國主義の根柢と目されたこの社は、猶更である。記者も又そんな感懷を持ちながら大鳥居をくぐつた。

戦災を受けたと思われぬ様な木立や、大村益次郎の銅像が、雨にけぶつていた。多くの遊覽バスが、ズラリと並んでゐる。

時ならぬ俄雨の爲、お上りさんは皆濡れ鼠である。それにもめげず、尻バシヨリをして参拜する、抜目のない商人が、ビニール製の合羽を大聲たて、賣つてゐる。お上りさんの胸の赤札には「兵庫遺族團」とあつた。

自分の子、夫兄の靈のしずまるこの社に、

人々は思い／＼の感懷に耽りながら、昇殿参拜をすることであらう。今日は鳩の姿も見えない。それでも参拜者は續々と後をきらない。何と云う理由もなしに、記者は異様な感に打たれた。

國民の心からする慰靈を

社務所に行き、宮司に面會を申し込む。この宮司ともなると、そう簡単には會えぬらしく、若い神職が出て來て應待をする。應接室の横額には「設神理以獎俗」と言う難しいものが掛つて居た。

「随分参拜者がいますね」

「ええ。今日は未だ少ない方です。特にこの頃は、遊覽客や修學旅行團が來ますので随分賑わいます」

「どう言う氣持ちで、参拜するのですかね」
「そうですね。人々各様でしょうね。しかし、私達としては、英靈を顯彰すると言うことよりも、本當に慰靈と言う氣持ちで來て頂くことを望んでいます。何か顯彰するとなると、非常に反動的なものの様です。此處に祭られてゐる人々の靈を慰めることこそが、本當にしてあげるべきことではな

いでしうか」

そんなわけで、修學旅行團の生徒に對しても、出来る限り、そうした氣持を徹底する様努力しているとか、現在神職官は二十五六人らしく、交替にこれ等を案内すると言う。白衣に水色の袴は、清潔なものを感ぜしめる。こうした人々が社に居る限り、この服裝をしていることは、寺院の寺務所等に於ても見ならつてよいことの一つである。

神社は靈魂を祭る所

「最近、無名戰士の墓の様なものが出来始めましたが、あれ等との關係は」

「私達の解釋と言うより、遺族の方々の考へなのですが、墓は骨を埋める所であり、神社は靈魂を祭る所だと考えている様です。ですから、兩者一體になつて始めて一つのものとも言えますし、私個人の意見としては、墓を建てるなら、神社の近くに建ててもらいたいと思いますね。遺族もそう

考えているようです」

こんな所にも、寺と墓との關係とも考えあわされ、興味を惹かされる。他の神社とは、一種獨特なこの社であるから、あらゆる點で異なつて居る。その點をたゞすと、

「元來、これは陸軍省の管轄だつたのです。現在、神社神道に付屬するわけですが神社本廳には屬せず、獨自のものとなつています」

「經濟的な維持は……」

「この點は、仲々大變でしてね。今は、奉賛會がそこまで行つていないので、靖國講と一般の賽銭が維持費になつています。全國の遺族との連絡は、この社の特色ですから、他の社とは大分その面でも違つて來ましようね」

戦犯は未だ合祀されぬ

「今年の大祭では何か變つたことでも」
「そうですね。今年は、今まで分つていなかった二十五萬の英靈の靈應奉安祭が行われます。これは相當な仕事でしてね」

「やはり天皇陛下は參拜されるのですか」
「いやその點は未だ分つていません」

「將來、この社の爲すべき仕事としては」
「そうですね。合祀さるべき英靈の中で、

戦犯と戦災者の靈をどうするかが問題でしょうね」

記者は始めて、戦犯は合祀されていない事を知つた。戦犯こそ祀れと言へば反動になるかも知れぬが、戦犯だから祀らぬということ、はどう言うことになるのであろうか。こんな所にも矛盾がある。所詮、屬國的日本の悲しい運命の一つであるのだ。

「この社の將來のあり方などは……」

「その點何とも言えませんね」

「例えば、自衛隊など、まあ譯の分らぬ軍隊の様なものですがね。若しああいう人々が何かの事で死んだ様なときは、どうするんですか」
「さあ、その點についても、未だ何等考へられておりませんし、未だ問題がそこまでは行つていませんから……」

こんな質問には、仲々答へにくそうだ。

かつての國防館は、遺族休憩室と、事務所にかわり、遊就館は、富國生命保險の事務所になつて居る。聞けば徴兵保險などは、この會社だつたとか。時が變れば、品も又變るものである。

今盛んに建築されているのは、北參集所と祭儀所で、奉賛會の最初の仕事だそうである。拜殿にぬかずくと、別掲の様な明治天皇の御製が大書されていた。(Y)

明治天皇御製

我が國乃爲とつくせる人々の
名もむさし野にとまる玉かき

盛岡の同信と結ぶ

佐藤賢順

九月三日、東京を立つて盛岡市へ行つた。

盛岡市内の浄土宗寺院の主催、浄土宗岩手教化園の後援で、四日五日の二日間、開催される第十五回佛教講座に出講するためである。大泉寺の鈴木重海師から再三のお招きがあつたし、前教區長昆野秀賢師とは「浄土」を通じてかねてから親しかつたし、現教區長武田寛隨師とは學生時代同じ教室で机を並べた仲であつたしするので、是非一度東北地方の同信と法縁を結びたいと思つていた折柄であつた。

講座は朝五時半から七時まで、夜七時から九時まで、都合四回、これは一般市民を対象とした。この講座の間に、午前午後都合四回の教區の教學講習がはいるので、二日間で十六時間位の講義になつた。心身の重労働でさぞお疲れでしょうと、主催者側はいろいろ私のからだを心配して下さいましたが、時間に無駄がなく、二日間をフルに使うことができて、

充實緊張の感じを持ちつづけられて、却つて有難かつた。

一般市民を対象とする朝夜の講座は、毎回百五十人位の聴衆で、盛會であつた、講題は「知性と愛情の佛教」であつたが、豫めテキストをプリントにして渡してあつて、講義の要旨や難しい言葉は讀んで理解するようにしてあつたので、（この試みは去る七月の三河教區の教化講習の時にもやつてみた）、これが皆に喜ばれて、話の下手な私の講義に仕舞いまでついてきてくれた。聴衆の中には、病院長、醫博、盛岡市の代表的市民などが多数加わつていたということである。

しかしこの成功は、ひとえに盛岡市内寺院と教區の各位の情熱と誠意の賜物である。いやその當然の成果であるときえいえる。盛岡市の浄土宗寺院は僅か五、六カ寺である。教區全體としても僅か三十カ寺そこそこの小教區（地域は尨大に擴がつているが）である。このうちの數人の人達が、中心になつて動いて、年々こうした盛大な催しを續けていることには誠に感激せずにはいられない。驛前から要所要所の辻々にはポスターがはられている。市

のラジオカーでも放送して廻つたそうだし、ラジオのローカルでも廣告したそうである。

教區には「浄土」の讀者が多い。「浄土」の編集が近頃めつきり好くなつたというのは一同の讃辭であつた。編集についての希望がいろいろ出た。私からは讀者を倍加していただくよう協力をお願いした。吉田絃二郎先生のファンも多く、先生の御近況についてたずねられた。

五日の夜行で青森に出た。深夜の出發をわざわざ鈴木、昆野兩師が送つて下さつたのは恐縮した。青森からバスで十和田國立公園を縦斷して湖上を周遊、十和田ホテルに一泊、秋田縣へ下りて湯瀬ホテルに一泊、歸京した。途中、葛温泉で少憩して、大町桂月老の墓に詣でた。老も生涯の旅人であつて、この地で終焉した。「余は、天下、山水を愛するの士に告ぐ。必ず往いて十和田湖を見よ。往きか歸りかには、必ず奥入瀬（おいらせ）溪を過ぎよ」十和田探賞を勧めている。なるほど十和田は天下の絶景である。私は阿蘇も耶馬溪も見た。層雲峽も寒阿も見た。しかしそれよりも遙かに深く廣いであらう。

芝園だより

○批判と悪口とは全然別のものなのだが往々にして一緒になつてしまふ。巻頭言もそういう意味で悪口になりやすいので、大いに自粛する積り。御批判頂ければ幸いです。

○學位論文の疲れを癒しておられた眞野先生秋冷と共に元氣を回復され、淨土にも稿債を果されるべく、色々と考えて下さるとのこと御期待下さい。

○七月號に雲藤氏をわづらわした中山文化研究所は、その後西本願寺で繼承し九月より再出發した。貴重なる佛教文化事業としてその發展を見守りたい。

○本誌にも時々寄稿される函館の須藤隆仙氏中外日報紙上で石丸悟平氏と論戦展開とか。冒頭に書いた批判と悪口の相即に注意された上華々しくどうぞ。(竹中)
○水爆の灰をかぶつた久保山さん

が、とうとう死んだ。誰の死よりも、人類の悲劇を代表したようなこの人の死は、悲しい。世界の人の心をゆり動かしたこの悲劇が、久保山さん一人で終るように、皆で實行する勇氣がないものか。

○隣りの中共とも、だい分國交がひらけて來た。向うから叫びかけられて腰をあげるでは、情ないことだが、そんなイジを張らないで、堂々と交際してほしいもの。

○N・H・Kの高瀬廣居君は、來る十月三十日、宮城晉彌先生の媒酌で華燭の典をあげる。先ずは芽出たい。前途を祝福します。

○學會が近づいて、各先生仲々多忙です。今年は、宗教學會(早大)印度佛教學會(正大)道教學會(正大)中國學會(早大)とかたまり、連日學會ずめとなりました。

(安居)
○本月は十夜、讀書の特輯等のため宗教人ハイライトは休みました

○日本短波放送が始つてゐるが、之は宗教關係が大に力押しをすると共に、その番組も豊富だ。淨土宗でも月三回アワーがある。之によつて、椎尾博士渡邊宗務長の放送が行われ、本日の二十一日には父も行いました。ふつうのラジオには一寸した装置があるので普及には今暫しという所。此外、同二十三日には、NHK「現代人と死生觀」と題する座談會に、赤岩榮、武田泰淳、島崎敏樹の諸氏と語り、又、NHK、十月十日第二後六、三〇より「眞理への道」なる放送を豫定。

○九月には吉田絃二郎先生の「二條城の清正」が吉右衛門によつて上演されるはずと報じた先月の本欄も、同氏の病により中止となり之を初校で取消して残念がつていた所、その急逝となり哀惜にたえません。全く先生の清正が、生命を得て表われたのが同丈の清正と

いつてもよい位で、先生の感一入と思われまふ。いつか、同氏と先生とのいろいろの暗合を面白く話されていた事が想い出される。能谷も當藝の一つ、本誌もいつかは訪問したいと思つていたのですが、(龍海)

誌代 會費半々年二百圓、一年四百圓(十共)。毎號定價三十圓十圓、前金切次第清算通知申上げます。確實便利な振替を利用して下さい。

「淨土」 十月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和廿九年九月廿五日印刷
昭和廿九年十月一日發行

(定價三十圓)

編輯兼 眞野 正 順
發行人

印刷人 春山治部左衛門

印刷所 共立社印刷所

發行所 法然上人續仰會

東京都墨田区芝公園五ノ一〇
電話 東京八二一八七番
芝(四三)一三二八

内山憲尚 著

幼児の言語教育と 童話教育

A 5 版 300頁 特價280圓

◇幼稚園・保育園・小學校・家庭に於ける言語教育と童話の教育について、懇切な指導書です。

◇著者は30年來斯道の理論と實際に携つて來られ、幼稚園長及び保育學校長として、更に駒澤大學に於て指導に當つて居られます。

◇本書は特に協會出版部に於て發行し、營利を離れた實費價で頒布しています

發行所 東京都品川區西品川 5~1002
發賣所 横濱市磯子區原町 4
豊島區雑司ヶ谷 6~1127

☆ 内容一般 ☆

幼児の言語教育

1 幼児の言語について 2 幼児の言語とその特質 3 幼児の生活と言語 4 標準語と方言 5 アクセント 6 言語のしつけ 言葉のしつけ・話し方のしつけ等

幼児の童話教育

1 幼稚園、保育所のお話について 2 幼児と童話 3 童話とは 4 童話の教育的價值 5 幼児童話の要素 6 リズムについて 7 幼児童話の作り方 8 幼児童話の言葉と音聲 9 幼児童話のゼスチャー 10 幼児童話の選び方と改作

日本童話協會出版部
日本保育材株式會社
株式會社 新日本社

鐵ブランコ2人乗	¥ 12,000
鐵ブランコ3人乗	¥ 14,000
鐵ブランコ4人乗	¥ 22,000
鐵ブランコ6人乗	¥ 26,000
椅子ブランコ4人掛	¥ 13,500
太鼓橋	¥ 10,000
ジャングルジム中型	¥ 28,000
單式滑臺中型	¥ 23,000
復式滑臺中型	¥ 36,500
動物付き遊動木	¥ 30,000

此他各種、一報カタログ送

配達實費(都内横濱 500 圓以内
其他1000圓以内)組立無料。

小田原・熊谷・土浦以遠は丸通
送り、(荷造費當社・送料着拂)
組立説明書送付



篠澤鐵工所

東京都大田區堤方町 7 1 8
電(75) 1024 (池上驛東3分)

幼稚園 保育園 運動遊具

・全國幼稚園・保育園・小學校・各團體に、良品を廉價にの
・ット1で、堅牢安全な遊具を納入好評を頂いております。松谷
・光明・芝・明照等の淨土宗幼稚園採用。